平成 30 年度

事務所だより　第３号

平成３０年９月１８日
益田教育事務所

自立活動の指導をするのは…

学校教育スタッフ　福島　淳次

早いもので今年度も前半が終わろうとしています。この間においても、特別支援学級への訪問指導が数多くあり、そのたびに、児童生徒の実態に応じた指導や支援、きめ細やかな配慮等、特別支援学級担任の先生方から多くのことを学ばせていただきました。また、公開授業のみならず研究協議においても、ほとんどの学校で全教員が参加しており、それぞれの場での児童生徒の様子や、どんな指導をしたのか等を共有し合うなど、特別支援教育への意識が高まっているように感じています。

研究協議の場では、多くの先生方に自立活動について知っていただきたく、話をさせてもらっています。学習指導要領の総則には、「特別支援学級において教育課程を編成する際、自立活動を取り入れること」と示されていますが、自立活動の指導は、特設された自立活動の時間はもちろんのこと、各教科、各領域の指導を通じても適切に行わなければなりません（気持ちが不安定なときには、その場を一時的に離れ、体を動かすなどして発散できるよう支援する等）。自立活動は、学校の教育活動全体を通じて行うものです。特別支援学級担任だけでなく、校内の先生方が連携して行わなければならないことが分かると思います。そのためにも、その児童生徒は自立活動でどの指導項目を扱うのか、個別の指導計画を活用し、情報共有をしておく必要があります。

【自立活動の目標】
個々の児童又は生徒が自立を目指し、障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、もって心身の調和的発達の基盤を培う。

ここでいう「**自立**」とは　…　児童生徒がそれぞれの障害の状態や発達の段階等に応じて、主体的に自己の力を可能な限り発揮し、よりよく生きていこうとすること

★もっている力を１００％発揮！
★できないことは支援を受けて
★支援は最小限に
～特新担研修資料より～

「**障害による学習上又は生活上の困難を主体的に改善・克服する**」とは…
児童生徒の実態に応じ、日常生活や学習場面等の諸活動において、
・障害によって生ずるつまずきや困難を軽減しようとすること
・障害があることを受容すること
・つまずきや困難の解消のために努めること

「**調和的発達の基盤を培う**」とは…
一人一人の児童生徒の、
・発達の遅れや不均衡を改善する
・発達の進んでいる側面を更に伸ばすことによって遅れている側面を促すようにする
→全人的な発達を促進すること

※「特別支援学校学習指導要領解説　自立活動編」より

また、通常の学級に在籍している児童生徒に対する指導においても、上記のような自立活動の視点をもって指導することは、児童生徒にとって有益なことです。自立活動の内容（６区分２７項目）も確認され、今後の指導に生かしていただけたらと思います。

移行期における外国語教育　～小・中の円滑な接続に向けて～

学校教育スタッフ　谷崎真理子

今年度から 2 年間にかけて小学校新学習指導要領の移行期間となります。外国語活動の授業については、小学校 3・4 年生は年間 15～35 時間、5・6 年生は年間 50～70 時間実施となりました。実際に小学校の先生の外国語活動の授業を見させていただく機会が何度かあります。中には「英語を話すのは高校生の時以来」という先生もいらっしゃいます。しかし、どの先生方も熱心に授業をしておられる様子が伺えます。

小学校での学びを中学校に円滑に接続するためには、中学校の先生方に小学校で児童がどのようなことを学習しているか、それを踏まえて中学校でどのようなことに留意するのかを知っていただくことが必要です。そこで、夏季休業中に中学校の英語科の先生方に「移行期における外国語教育」について説明をしました。

主な内容については以下の通りです。

１．小学校における移行期の留意事項と学習内容について

〇高学年では外国語科の内容（三人称 He,She、動名詞、過去形、活字体の大文字、小文字、「読むこと」「書くこと」の言語活動）を扱う。移行期は外国語科ではなく外国語活動であるため、アルファベットの定着は求めない。

〇ゲーム的な活動よりも必然性のある場面設定の中で自分の考えや気持ちを英語を使って表現したり伝えあったりする言語活動が重視される。

２．中学校での留意事項について

〇小学校で過去形や動名詞等を扱うことを受けて、中学校の早い段階で「話すこと」を通してこれらの表現を取り扱う。

〇小学生が今まで以上に多くの語を学習することを踏まえて、活動を通して語彙数を増加する。

実際にデジタル教材や新教材を見ることで、中学校で具体的にどのような学習を意識すればよいか、理解を深めていただきました。中学校の英語の先生方に一番お伝えしたのは、**小学校で英語を学んだ子どもたちは、「もっと英語を話したい」「もっと自分のことを英語で表現したい」という意欲をもって中学校に入学する**ということです。中学校の先生方はその専門性を生かし、さらに英語で表現する楽しさや喜びを子どもたちに伝えていただきたいと思います。また、小学校の先生方は、英語が得意不得意に関わらず、児童との英語での対話を積極的に取り入れ、ご自身も英語の学習者としての姿勢を子どもたちに示していただきたいと思います。

小学校５・６年生の新教材「We can !」の最後のページには次のようなメッセージが書かれています。これは、子どもたちが将来に渡って主体的に英語学習に取り組んでもらいたいという願いです。今後も小中での接続を円滑にし、子どもたちの学びを深めていきましょう。

「特別活動」のススメ

津和野町教育委員会　派遣指導主事　菊池　貴宏

４年に１度のサッカーの祭典、ワールドカップ。代表チームの活躍で大いに沸いた日本国内でした。そんな嬉しいニュースとともに、もはやワールドカップの定番となっている話題が今回も伝わってきました。日本の応援団や選手が、自分たちで使った席や部屋を『掃除』して帰っていったというニュースです。もう毎回のことなのに、海外のメディアにとっては、その度に記事として取り上げずにはいられない、大きな感動があるようです。日本のメディアでもこのことを盛んに取り上げ、色々な視点からの論評がなされました。

しかし、教育界に長く身を置く私にとって、このことの答えは一つです。「日本では、学校で掃除をする心を教え、またそれを日々師弟で実践しながら学ばせているから。」他には考えられません。日本型教育のよさ、成果がロシアの地でも発揮されたのではないでしょうか。そう言えば、以前、ニュージーランドからおいでいただいたＡＬＴの方とお話した時のことです。「日本と自分の国の学校の様子を見て、何が１番に違うと感じますか。」と尋ねると、彼の口から真っ先に出た言葉は、この『掃除』のことでした。「母国の教育が日本に劣ると思うようなことは殆どない。だけど、自分たちの学校を自分たちの手で美しく『掃除』している日本の子どもの姿には、いつも感動を覚える。我が国ではとてもまねできそうにないな。」と、悔しそうに話してくれたことを思い出しました。

新しい小学校学習指導要領に、実はその『掃除』にふれた部分が１カ所だけあります。すでに今年度から小中学校で先行実施されている特別活動です。学級活動に新設された〔（３）一人一人のキャリア形成と自己実現〕の〔イ　社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解〕の内容にそれはあります。この（３）をどう捉え、どのような方法で指導をしていくのか、全国でも本格的な実践研究が始まっています。管内の津和野小学校、津和野中学校でも、次年度の中国地区特別活動研究大会の開催にあわせ、研究が進められています。津和野小学校においては（３）の内容の授業公開も予定されています。新たな内容も増え、特別活動はまさに文明開化とも言えるような時を迎えています。

日本の学校では「授業」と「生活」の両面からの指導を大切にしてきました。家庭でもそうであるように、「生活」と「人間関係（集団）」があってこそ授業や道徳教育、生徒指導なども効果を上げることができます。そして、そのような基盤を、子どもたちによる子どもたちのための「楽しく豊かな学級・学校づくり」を通してつくってきたのが特別活動です。決して『掃除』だけではありません。世界に誇る日本の特別活動、今こそおススメです。

学級活動（３）一人一人のキャリア形成と自己実現

イ　社会参画意識の醸成や働くことの意義の理解（小学校）

掃除などの当番活動や係活動等の自己の役割を自覚して協働することの意義を理解し、社会の一員として役割を果たすために必要となることについて主体的に考えて行動すること。

「なりたい未来の自分」の実現に向けて、「現在の自分」の生活をよりよくするために頑張ることを考え意思決定する。

未来のわたし

☆集会や行事の後の自分
☆1週間先の自分
☆1年先の自分
☆卒業する時の自分
☆中学生、高校生の自分
☆仕事についた自分
☆将来の自分

どうしたら近づけるかな？
今何をしたらいいのかな？
～未来志向の意思決定～

『地域づくりを担う人づくり』

吉賀町教育委員会　派遣社会教育主事　水上　真悟

人は生まれてから死ぬまでの間に３万人の人と出会うと言われています。その中には、新たな価値に気付かせてくれ、自分を高めてくれるような素敵な出会いがあります。みなさんには、最近、素敵な出会いがありましたか。私は心が震えるような、こんな素敵な出会いがありました。

出会い①

吉賀町では毎年４月に「よしか・夢・花マラソン」が行われます。この、よしか・夢・花マラソンは県内外より１３００人近くの参加者があり、多くの人が吉賀町に集まります。よしか・夢・花マラソンを目前にしたある日、マラソンのコース上にある地域の方が「あー、えらいけど、これから草刈をせにゃいけんわぁ。」と言われていました。私が「暑いですんで、無理をせんでくださいね。」と伝えると、その方は「そんなこと言っても夢・花マラソンがあるけぇ、うちの地域を走りに来た人に、みっともない所を見せられんわぁね。」と答えられました。地域イベントを我がこととしてとらえ、参加者に対しておもてなしをしようとしている姿、またふるさとを大切に思い自ら行動する姿に私は胸が熱くなりました。

出会い②

ある公民館の館長と話をしている時「年をとって体がしんどいが、今年もそろそろ畑で野菜をつくらにゃいけんわ。」と言われました。「ご自分で食べられるものを作られるんですか。」と聞くとその館長は「近所の子どもたちに野菜を収穫する体験をさせてあげたいんよ。」と答えられました。言葉とは裏腹に誇らしげな顔をされていたことがとても印象的でした。地域の子たちをわが子のように想い、その子たちの育ちを支える姿と心の温かさに私は胸が一杯になりました。

このお二人に共通していることは、負担や痛みを受け入れたうえで地域のために一肌脱げる人ということです。私はこのように地域を愛し、そのために一肌脱げる人を『地域づくりを担う人』というのではないかと思います。このような人が増えることによって、地域の自治の力が高まり、持続可能な社会が形成されていくのです。また、そんな大人の姿が次世代を担う子どもたちに大きな影響を与えていることは明確です。

このような人を地域にたくさん増やすために、学びを通した人づくりを行う環境整備をすることが、社会教育行政にあたえられた役割です。そのために私たち社会教育主事は、人と人を繋ぎ、色々な仕掛けを考え、様々な人に学びの場を提供しています。その一例が、８月５日に開催した益田市、津和野町、吉賀町の３市町の中高生と大人を集めた対話の場『ミーティングし益鹿（ますか)』です。これは、次の３点を目的として行いました。

- ３市町の中学生が、自ら考えた意見を交換・共有しながら市町を超えた同世代をはじめ異世代と交流することで、つながりを築くこと。
- 地域で活動を実施している、あるいは計画している大人と中学生が交流することで、多様な価値に触れ、地域等での活動や学校内の諸活動に主体的に参加、参画していく機運の醸成を図ること。
- 大人は、自身のプロジェクトを中学生や他の大人にアウトプットすることでプロジェクトのさらなる推進を図る。また、大人同士の繋がりが深まり、新たな団体や活動が生じ、中学生の地域活動をより活性化すること。

参加した吉賀町の大人たちからは「今まで知らなかった中学生の考えに触れることができた。」「中学生には、これからとても期待できる。」という声が聞かれました。そして、中学生の前向きな気持ち、素直な姿勢を目の当たりにした大人が、中学生との出会いから自分たちの役割を学び「次はここに参加していない、うちの地域の中学生や大人にもこのような場を作りたい。吉賀町でもやろう。」と次への行動へ一歩踏み出すきっかけになりました。

今後も『地域づくりを担う人づくり』の伴走者として、このように地域の大人や子どもたちが様々な学びを繰り返していけるよう支えていきたいと思っています。